

2016年10月2日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 3章 11～17節

説教：御名を信じる信仰によって

はじめに

ペテロとヨハネが宮で祈るために美しの門と呼ばれるところを通ろうとしたとき、生まれつき足の不自由な男が施しを求めてきました。ペテロはその男に向かってこう言います。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって歩きなさい。」そうして手を取ると、男はすぐに立ち上がり、歩き始めました。

この事件のうわさはすぐに周りの人たちに広まっていきます。大ぜいの人たちがこの男のことに目撃し、驚かされました。そのときペテロはなにを語ったのか。今日はその所を見ていきます。

1 ペテロ

1) 力か、信仰深さか？

押しかけてきた人たちは、足のなえた男が小さいときからずっと物乞いをしていたのを知っています。その男が今自由に歩き回り、はねたりおどつたりもしている。どうしてこんなことが起きたのか。とても信じられない。誰もがその理由を知りたいがろうとしています。

こんなとき、いつの時代でもみな同じことを考えるものです。ペテロが不思議な力を持っていたからではないのか。いやいや、ペテロがすばらしい信仰をもっているからではないか。だいたいそんなことを考えるわけです。この時点では人々は観客で外野に座って言いたいことをいってあげればよかった。と

ころがこのあとペテロが語ったことばによって、自分たちは外野席にいるのではなく、この試合のプレーヤーであったことを知らされていきます。その結果、4章4節で、「みことばを聞いた人々が、大ぜい信じ、男の数が五千ほどになった」とあるとおりのことが起きていく。奇蹟を見ただけでは、人は信じたのではない。ペテロの口から出るみことばを聞いて信じていった。いったいペテロは何を語ったのでしょうか。

2) イエスのよみがえりの証人に過ぎない

まず最初に確認したことはこれです。足のなえた男がいやされたのは、自分に何か力があるとか、信仰深いからではない。ただ自分たちはこのような者に過ぎないと、15節の後半で述べています。「神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。」「私たち」とはペテロとヨハネのこと。もっと正確に言えば十二使徒のことです。人々が驚くような奇蹟を起こしながら、ペテロのことばは非常に控えめです。

ときどき、こんな話を聞きます。「聖書にあるとおりに、教会でたくさんの奇蹟を起こし、その奇蹟によって信者を増やすべきではないか。そのために祈るべきだ。」一見もつともなような話に聞こえるのですが、聖書をよく読んでいただきたい。使徒たちの使命はどこにあったのか。人が驚くような奇蹟を起こし、人を大ぜい集めて信者を増やしていく。それは彼らの使命ではなかった。自分たちはただ、イエスが死者の中からよみがえられた

ことを証しするだけ。そう言っています。もちろんときには奇蹟が起きることはあります。しかし、あくまでもイエスの復活を宣べ伝えることが第一の目的であったことを覚えておいてよいと思います。

2 あなたがたは

1) 神の子イエスを引き渡し、殺した

ペテロは自分の使命に従って、イエスが死者の中からよみがえったことを証していきます。でもそのことを言うためには、その前にイエスはなぜ死ななければならなかったのか。そこからスタートしなければなりません。イエスが事故か病気で亡くなりましたというのなら、イエスは私たちと何の関わりもなかったでしょう。でも、ペテロはこう説明します。13 節から 15 節の前半まで。「アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの父祖たちの神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたは、この方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その面前でこの方を拒みました。そのうえ、このきよい、正し方を拒んで、人殺しの男を釈放するように要求し、いのちの君を殺しました。」

人殺しの男とはバラバのことです。

イエスは事故や病気で死んだのではなかった。あなたがたが自分の手で殺したのだ。どうやって殺したか。あなたがたは、イエスが神を冒とくしたという罪で告発し、裁判にかけたではないですか。裁判長のピラトは最初、イエスには死罪にあたるような罪を認められないので、釈放しようと考えていました。ところが人々が集まって来てイエスを殺せと叫びだした。このままでは暴動に発展しかねない。もしそんなことになればローマ総

督としての監督責任が問われる。そこでピラトは、バラバを釈放して、イエスを十字架刑に処することにした。イエスを殺したのはあなたがたなのだ、とはっきりと言いました。

これを聞いていたのは、ほとんどがエルサレムに住んでいる人たちですから、知らないはずはありません。あのとき、自分がどんなことを思っていたのか、まだ記憶に鮮明です。イエスが登場した最初の頃は、この男に大きな期待をかけました。もしかしてローマ帝国を追い払い、イスラエルに神の国を打ち立ててくれるヒーローになるのではないか。イエスがエルサレムに入るとき、その期待は最高潮に達し、人々は大歓迎した。ところが、イエスが逮捕されたというのを聞いたとき、それまでの期待は大きな失望に変わってしまう。きのうまでヒーローだったのが、今日はペテン師、詐欺師のように見えてきました。逮捕されても、なにもできない自分も救えないような男を信じていたなんてなんと馬鹿だった。そう思うと急に腹が立ってきた。そんな男は処刑すべきである。律法学者や祭司長たちの策略もあって、あっという間に町中大合唱になっていきます。拳を振り上げ、声を張り上げ、イエスをののしる声が満ちていきます。そんな中でイエスは十字架につるされ、死んでいかれました。

今は文明の進んだ時代なので、こんなことは起きない。自分できちんと考えて行動できると言う人もいますが、実際どうでしょうか。人間の罪の性質は変わりません。二千年前であろうが今であろうが、人のやることは同じです。未来に希望が持てなくなると、だれかを悪者に仕立てて攻撃する。いま、ヘイトスピーチのような問題が注目されていますが、まったく同じことが根っこにあるような気

がします。

2) 本当にイエスはよみがえったのか？

イエスが十字架につるされたとき、人々は激しく自分の怒りをぶつけ、やがてイエスが死んだのを見て、満足して家に帰りました。あれから数ヶ月か半年くらい経ったでしょうか。イエスのことなど話題にも上らなくなっていたとき、突然ペテロの口からイエスの名前を聞くことになります。あなたがたどのようにしてイエスを殺したのか。あのときは狂ったように、イエスを殺せと叫んでいました。いま時間が経ち少し冷静になってからあのときのことを思い返すと、いったい自分は何をしていたのか、確かにペテロの言うとおりにかもしれないと感じ始めます。もしペテロの言うとおりに、イエスが神から栄光を与えられた方であったなら、自分たちは大変なことをしたことになる。でも本当にそうなのか。本当にイエスは神から栄光を与えられた特別な存在なのか。死からよみがえったのか。肝心の所がまだはっきりしないままです。

3 イエスはよみがえられた

1) この男を見なさい

この疑問について、ペテロは二つの証拠を挙げて説明します。15節後半から16節。「しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。そして、このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられた信仰が、この人を皆さんの目の前で完全なからだにしたのです。」

イエスがよみがえったことの証拠として

ペテロが示した一つ目の証拠。あなたがたがよく知っている、さっきまで足なえだったこの人を見なさい。この人が証拠です。ペテロはこう言ったのです。「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」そうしたら立って歩くことができた。もしイエスが十字架で死んだままだったままだったら、こんなことが起きるか。死んだ者が奇蹟を起こすことができるのか。できません。できたということは、イエスは生きている証拠ではないですか。これが一つ目。

2) イエスによって与えられた信仰

そして二つ目の証拠。この人の足が完全にいやされたのはなぜか。信仰がなければ神のいやしはいただけない。それはイスラエル人であればだれもが知っていることです。ではあなたがたは毎日この人を見ていたからわかるはずだ。この人がどんな信仰であったか。奇蹟をいただくような信仰があったか。どうして思えない。ではいったいどこから信仰は生まれたのか。「イエスによって与えられる信仰」です。信仰もイエスが与えてくださった。イエスが生きているから与えることができる。このように、この人の身に起きたことがすべて主イエスが死からよみがえられたことを証している。ペテロはそのように言いました。

これは、私たちにとって大きな慰めです。努力してすばらしい信仰者、あるいはクリスチャンにならなければと、どこかで思っておりますが、信仰さえも主が与えてくださるものなら、努力ではない、ということになります。では何もしなくてよいのか。いいえ。します。どうやってか。私たちは試練が目の前に立ちふさがるときに何をしますか。

命令されなくても祈るでしょう。「主よ、どうか奇蹟を起こしてください。」祈ってよいのです。でももう一つ祈ってもよいことがある。「主よ。私をあわれんでください。あなたが信仰を与えてくださらなければ、私は信じることができない者です。」

どうして信じられないのか。簡単です。私は主を殺した者だからです。神を殺した者が、神を信じる。もうそれだけで普通ではありえないことだとわかります。それなのになぜ信じられるのか。神の子を殺した者さえも、神は赦してください。その赦しがあったからこそです。ペテロはそのことを身をもって経験しました。だから言えるのです。

毎日が何も代わり映えのない日々に見えていたかもしれません。でも目を閉じて霊の目で見渡すならば、主のめぐみが私たちを十重二十重に取り囲んでいるのが見えてきます。